



商船系大学における海事人材育成に関する懇談会 (第3回)

船舶実習制度検討に関する 学生アンケート 集計結果

神戸大学 海事科学部・海洋政策科学部・乗船実習科

1. 海事科学部4学年（船舶実習1ヶ月以上履修済み）アンケート結果
2. 入学直後の志望、学科・コース配属、乗船実習科進学の実績

2021年9月17日（金）

1



1. 船舶実習制度検討に関する学生アンケート

目的（学生に明示、以下抜粋）：商船系大学における海事人材育成に関する懇談会において、乗船実習制度について意見交換が行われており、懇談会での議論に学生視点を適正に反映させるため、学生アンケートを実施する。

対象学生：海事科学部4学年学生で、少なくとも1ヶ月以上、海事科学部「船舶実習」としてJMETS練習船での乗船実習経験を有する学生（123名）。

設問：大項目9（回答者情報を含む）、
小項目（単一選択17、複数選択4、自由記述3）

方法：メールおよび教学システム（学生向け電子掲示板）によりアンケート（設問および記入）ファイルを提供し、メールにより回答を回収。
可能な限り記名を求めたところ、回答提出者は全員が記名。

期間：9月6日（月）～9月10日（金）

回答者数：60名（N 54%、E 59%、M 35%）

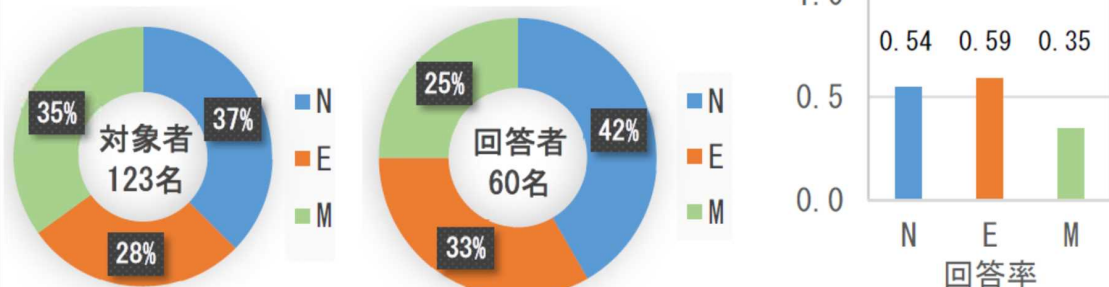
2

1.船舶実習制度検討に関する学生アンケート

対象学生、回答学生に占める学科・コースの比率 および
学科・コース毎の回答率

- 4学年学生は、進路が内定している学生が大半であり、海技者志向のあるNコース、Eコース学生の回答率が高い。
- N、Eは過半数であり全体でも49%、夏季休業中の短期間実施を考慮すると、本件課題意識が、学生間でも高い証であると言える。

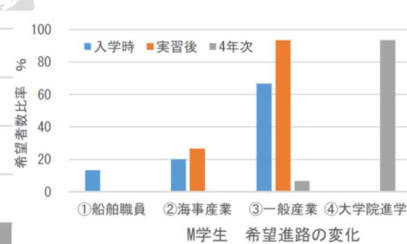
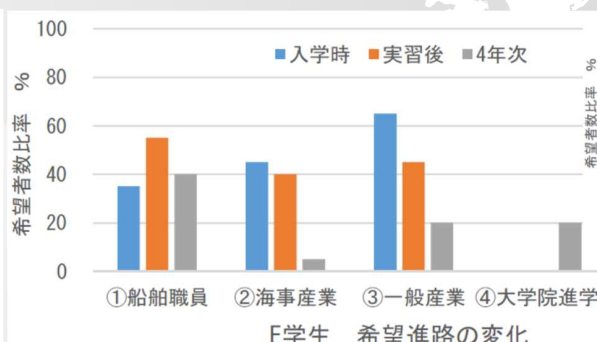
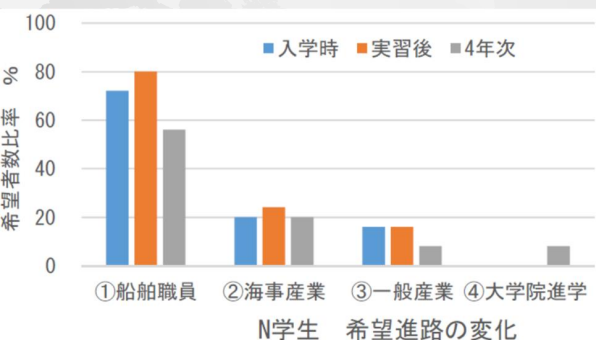
N : グローバル輸送科学科 航海マネジメントコース
E : マリンエンジニアリング学科 機関マネジメントコース
M : マリンエンジニアリング学科 メカトロニクスコース



3

学生の希望進路の変化 (学科・コース毎の集計)

- Nコース学生は、入学直後から船舶職員を目指していた傾向が明良。
- NEコース学生共に、短期乗船実習を経ることにより船舶職員を目指す割合が増大する。
- Nコース学生は、船舶職員を目指す割合が、入学直後よりも4学年において低下。
- Eコース学生は、船舶職員を目指す割合が、入学直後よりも4学年において増大。
- Mコース学生は、大学院進学割合が極めて高い。
- Mコース学生にも、入学時には船舶職員を希望進路としてあげていた者が居る。(乗船実習が、自らの適性を判断する機会になったと読み取れる。)



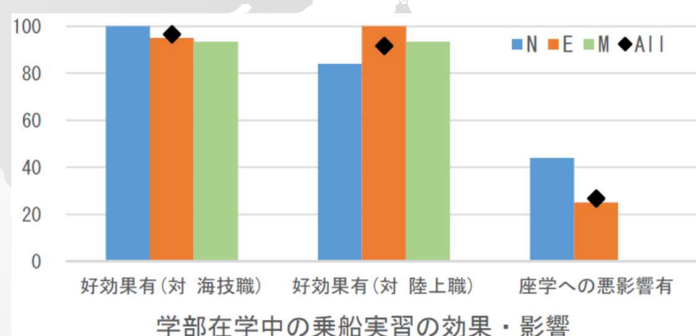
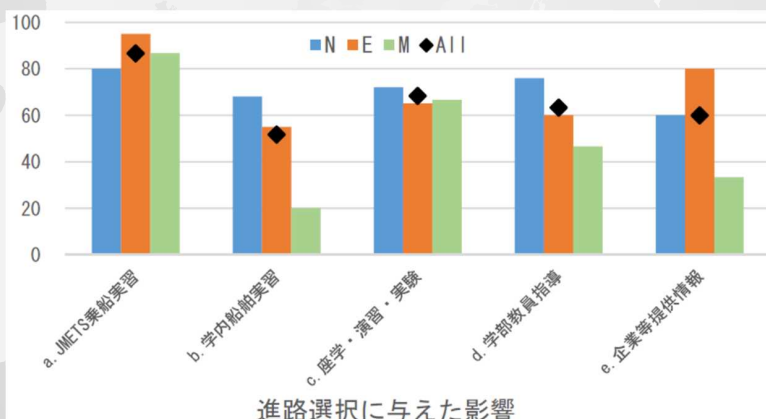
4

進路選択に与えた影響

- 全ての学生において、JMETTS練習船による短期乗船実習の影響が極めて大きい。
- インターンシップなど企業等による情報提供は、全体では、学部内教育指導と大差ない影響であるものの、Nコース学生への影響が相対的に小さいことに注目。
- 学内船舶実習の影響が相対的に小さいことは、標準3泊4日をコロナ禍対応のため、日帰り or 岸壁実習に変更せざるを得なかったことも要因の一つか？

学部在学中の乗船実習による効果・影響

- 座学と乗船実習のサンドイッチによる好効果が絶大、ただし、乗船中の学内開講科目（座学）を履修できなかった声にも注目。



5

乗船実習を学部から分離する場合の影響

- 連続集中した船舶実習を好適に捉える声、および、乗船実習科修了が延びた場合でも進学したいとの声は多くはないものの、その多くがNコース学生であることに注目。
- 乗船実習科の期間延長の場合に進学したくないとの声は、NEコース共に多くない。
→ ただし、⑥～⑨回答が多いことに注目
- 乗船実習を学部から分離すれば、座学を含む修学意欲への悪影響、船舶職員の志望を選択する機会の喪失、志望選択のミスマッチの増大、経済損失の増大など、悪影響を危惧する声が過半数である。
- 本影響に関し得られた自由コメントは別に示す。

【選択肢：複数選択可】

- ①座学修了後の連続・集中した船舶実習により実務教育訓練が充実すると思われ、望ましい
- ②学部在学中の船舶実習が短くなれば、授業の取り方の自由度が上がるので、望ましい
- ③海技士の資格を取るために必要なので、修了時期が延びても乗船実習科に進学したい

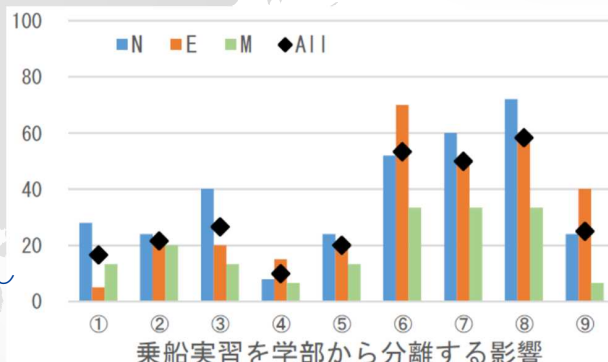
- ④乗船実習科での乗船期間が6ヶ月から9ヶ月に延びるならば、乗船実習科には進学したくない
- ⑤乗船実習科での乗船期間が6ヶ月から12ヶ月に延びるならば、乗船実習科には進学したくない

- ⑥学部での船舶実習が修学モチベーションの維持・高揚につながるので、学部での船舶実習を残した方がよい

- ⑦学部在学中の船舶実習が無く（短く）なると、（船舶職員としての）進路選択に不安を感じる

- ⑧学部在学中の船舶実習が無く（短く）なると、航海士、機関士としての職業イメージが湧かず、船舶職員になろうとする学生が減ると考えられる

- ⑨乗船実習科の修了時期が延びると、授業料負担増や就職の遅れなど、経済的な不安を感じる



6

多科配乗（他課程学生・生徒との混乗）の影響

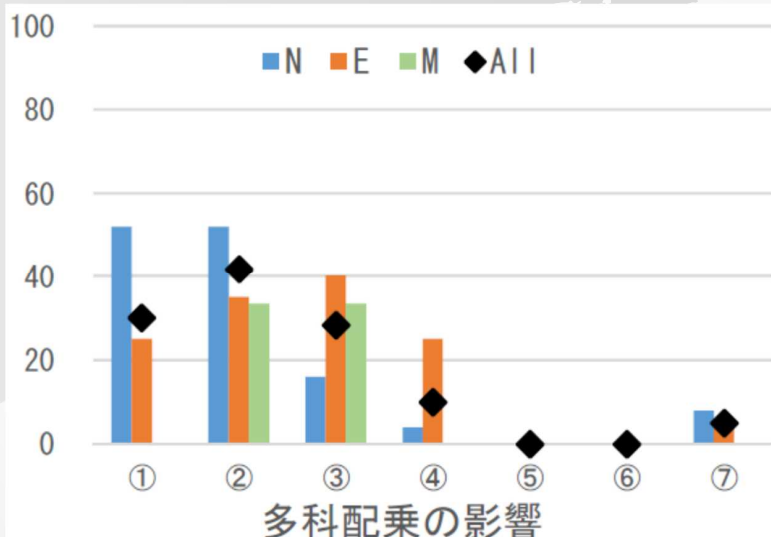
- 「好影響あり」あるいは「影響なし」の意見（①から④）がある一方で、実習生自らに悪影響がみられたとの意見（⑤および⑥）が皆無であることに注目。

- 悪影響の一つ⑦の意見はわずかにある。

- 本影響に関し得られた自由コメントは別に示す。

【選択肢：複数選択可】

- ①特段の影響は感じなかった（淡々と、自らの実習を行えた）
- ②（好影響）多様な実習生に接し、視野が広がった
- ③（好影響）実習生の間で、相互に指導（情報交換）する機会があり、実習効果が向上した
- ④（好影響）士官・乗組員による多様な（他課程などの）指導に接し、実習効果が向上した
- ⑤（悪影響）三級海技士課程に専念した指導を受ける機会が乏しかった
- ⑥（悪影響）実習生の間で、実習内容が異なり、実習の効率が低下したと感じた
- ⑦（悪影響）多様な指導に対応するための士官・乗組員の負担が大きいと感じた

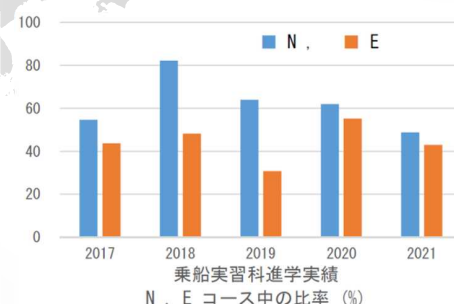
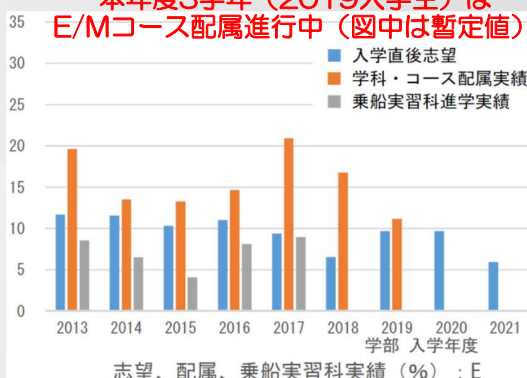
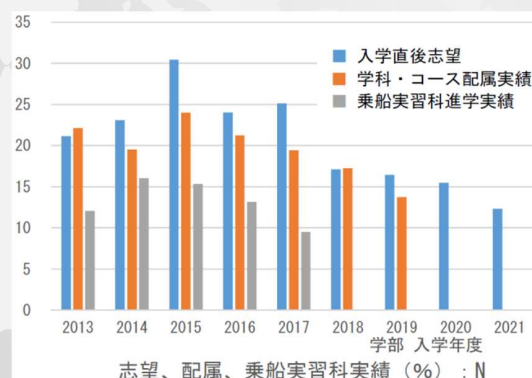


7

2. 入学直後の志望、学科・コース配属、乗船実習科進学の実績

- 「志望、配属、乗船実習科実績」の縦軸は、学部全体に対する割合である。
- 入学直後にNコース配属を希望する学生は10数%~20数%居る一方で、Eコース配属を希望する学生は10%前後に留まる。
- 学科・コース配属実績は、Nコースでは入学直後での志望より減少する一方で、Eコースでは入学直後の志望より大幅に増大する。
- 乗船実習科進学実績は、Nコースでは過半数、Eコースでは4割前後である。

本年度3学年（2019入学生）は
E/Mコース配属進行中（図中は暫定値）



8